

恢復期

堀辰雄

【テキスト中に現れる記号について】

〈〉：ルビ

(例) 枕^{まくら}もと

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

(例) 彼^ら一等

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

(例) 4「#」4「」に傍点

第一部

彼はすやすやと眠っているように見えた。 それは夜ふけの寝

台車のなかであつた。 ……

突然、そういう彼が片目だけを無気味に開^あけた。

そうして自分の枕^{まくら}もとの懐中時計を取ろうとして、しきりにその手を動かしている。しかしその手は鉄のように重いのだ。まだその片目を除いた他の器官には数時間前に飲んだ眠り薬が作用している

らしいのである。そこで彼はあきらめたようにその片目を閉じてしまふ。

が、しばらくすると、彼の手がひとりでに動き出した。さっきの命令がやっといまそれに達したかのように。そうしてそれがひとりで枕もとの懐中時計を手搜りしてている。その動作が今度は逆に、彼自身ほとんど忘れかけていたさっきの命令を彼に思い出させる。

「まだ三時半だな……」

彼はそうつぶやくと、一つ咳をする。するとまた咳が出る。そうしてその咳はなかなか止みそうもなくなる。まだ一時間ばかり早いけれども仕方がない。もう起きてしまおうと彼は思った。彼は上衣に手をとおすために身もだえするような恰好をする。やっとそれを着てしまつと、半年近くも寝間着でばかり生活していた彼には、どうもそれが身体にうまく合わない。ネクタイの結び方がなんだかとても難かしい。靴を穿こうとすると、他人のと間違えたのではないかと思う位だぶだぶだ。そういう動作をしながら、彼はたえず咳をしている。そのうちにそれへ自分のでない咳がまじっているのに気がつく。どうも彼の真上の寝台の中でするらしい。おれの咳が伝染ったのかな。彼は何気なさそうに自分の足もとに揃えてある一組の婦人靴を目に入れる。

彼はやっと立上る。そうしてオキシフルの壇を手にしたまま、スチームで蒸されている息苦しい廊下のなかを歩きだす。靴につまずいたり、靴をふんづけそうになる。一つの寝台からはスコッチの靴下をした義足らしいのが出ていて彼の邪魔をする。そんなごった返しのなかを、彼はよろよろ歩きながら、まるで狂人かなんそのように眼を大きく見ひらいている。……

そのときふと彼は、そういう彼自身の痛ましい後姿を、さつきから片目だけ開けたまんま、じつと睨みつけている別の彼自身に気がついた。その彼はまだ寝台の中にあつて、ごたごたに積まれた上衣やネクタイや靴のなかに埋まりながら、そしてたえず咳をしつづけているのであつた。

夜の明ける前、彼はS湖で下車した。

其処からまた、彼の目的地であるところの療養所のある高原までは自動車に乗らなければならなかつた。途中で彼は、その湖畔にある一つのみすばらしいバラック小屋の前に車を止めさせた。そこには、もと彼の家で下男をしていたことのある一人の老人が住んでいた。その老人はもう七十位になっていた。そうしてもう十何年というもの、この湖畔の小屋にまつたく一人きりで暮しているのだった。ときどき神経痛のために半身不随になるということを知っていたが、そんな時は一人でどうするのだろうと、その老衰した様子を見ながら彼は思った。「それにしても、何故こんなにまでなりながら生きていなければならぬのかしら？」そういう今の自分にはよく解らないような疑問がふと彼の心を曇らせた。

そのバラック小屋の窓からは、古画のなかの聖母の青衣のような色をした、明けがたの湖水が、ほんのりと浮んで見えた。老人はいつか彼の前に古びた聖書を開いていた。そうして彼のために熱心な祈禱を شدした。だが彼はそれには別に耳を貸そうともしないで、ただ不思議そうに、老人の手にしていた聖書の背革が傷んでいると見えて一面に膏藥のようなものが貼つてあるのや、その老人の

ぶるぶる顫ふるえている手つきが何となく鶏の足に似ているのを眺ながめていた。そしてその二つのものは聖書の文句よりも彼の心に触れた。まるで執拗しつような「生」そのものの象徴でもあるように。

療養所はS湖から数里離れたところのY岳ふせとの麓ふもとにあった。

そうしてその麓ふもとのなだらかな勾配こうはいに沿うて、その赤い屋根をもつた大きな建物は互に並行した三つの病棟に分れていた。それにはそれぞれに「白樺しらかば」とか「竜胆りんとん」とか「石楠花しゃくなんげ」などと云う名前がついていた。彼の入った「白樺」の病棟はY岳の麓ふもとにもつとも近く、そこには他の患者もあまり居ないらしく、そしてその裏側はすぐ一面の雑木林になっていた。彼の病室からはベッドに寝たままで、開け放した窓を丁度よい額縁にして、南アルプスのまだ雪に掩おおわれているロマンチックな山頂なが眺められた。

彼の病室には南向きの露台が一つついていた。其処そこからならばS湖も見えるかも知れないと思つて、そこまで出て行つた彼はそれらしい方向には一帯の松林をしか見出みいださなかつた。が、その代りに彼は其処そこから、下の方の病棟のあちらこちらの露台に裸かの患者たちが日光浴をしている有様を一目に見ることが出来た。みんな樹皮のような色の肌はだをしながら、海岸でのように愉たのしそうに腹這はらいになつていた。

彼の想像はそういう人達と同じように日光浴をしている裸かの彼自身の姿を描いた。そして「わが骨はことごとく数うるばかりになりぬ」そんな文句を彼はふとつぶやいた。それはかの老人が彼のために読んでくれた聖書の中の一旬じゆんだった。いちばん何でもないよう

な文句を覚えていたものと見える。「わが骨はことごとくか……」
それはいつの間にか話し相手のない彼の口癖になってしまった。

夕方になると、彼はひどい疲労から小石のように眠りに落ちた。

それから何時間たったのか覚えはなかったけれど、彼が目をさまして便所に行ったのは、だいぶ深夜らしかった。彼は便所から帰って、一種の臭いのただよっている病院の廊下を、同じような病室で NO.1 から一つずつ丁寧に数えて歩いて来ながら、さて彼の病室である四番目のやつのドアを開けようとして、ひょいと部屋の番号を見たら、それは NO.5 だった。彼は部屋の勘定を間違えたのだと思つて、すぐ廊下を引き返した。が、ひとつ手前の部屋に来て見るとそれは NO.3 になっていた。おれは何と寝呆けているのだろう。自分の部屋の前を何遍も素通りする。そう思つてまた踵を返した。が次の部屋まで来て見るとやっぱりさっきの NO.5 であつた。まさかお伽噺じゃあるまいし、おれが夜中に起きて便所へ行っている間に おれの部屋が何処かへ消えて無くなってしまつているなんて！……そうは思つたものの、彼はしばらくの間、電燈ばかりこうこうと燦かがやいている深夜の廊下のまん中に愚かそうに立ちすくんでいたが、ふと其処にただよっている臭いが過酸化水素の臭いだと気づくが早い
か、彼は彼の部屋のドアの外側の把手には、何故だか知らないけれど、ガアゼの繃帯ほうたいが巻いてあつたことを突然思い出した。そうして彼は、彼が何遍もその前を往復した NO.5 の部屋のドアの把手がその通りであることを認めた。おれはこのおれの手でさっきそれを握りながら今までこいつに気がつかなかつたとは何事だい！（そこで彼は思いきつてそのドアを押し開けた。）やっぱりおれの部屋だ。空っぽのおれがおれを待っている。夕方、おれがそこら中に脱ぎ棄て

ておいた外套がいとうや上衣や襯衣シャツや、それから手袋や靴下のようなものまでが、みんなそれぞれにおれの姿を髣髴ほうふつさせている。……

彼はやっとこさ自身のベッドにもぐり込みながら、今しがたの変な錯誤をゆっくりと考え直した。つまり、病院にはNO.4なんて部屋は始めから無いのだ。4「#「4」に傍点」は不吉にも死「

#「死」に傍点」と暗合するから。で、おれの部屋は四番目であるのだけれど、しかも5という番号がつけられている。ただそれきりなのだ。……だが待てよ、その厄介な番号をもった部屋をすっかり持て余してしまったこの病院の建築師は、ひよつとしたら一種の魔法のようなもので、この隣りのおれの部屋にそれをすぽと嵌はめておいたかも知れないぞ。そうしてその二重の部屋（つまりこのおれの部屋だが）、それは夢と現実とをくつつけたように、何処かですこしずつ喰くい違いを生じている。そうだ、こんな夜ふけなどあの露台に出てこっそり窓の外からこつちを覗のぞいて見ると、丁度あの重屈折をする方解石のようなものを通して見たかのように、この部屋の中のものがすべて、そしておれ自身までがぼんやり二重になって見えそうな気がする。

そのとき不意に前夜の寝台車の中のごたごたとした光景が彼に思い出された。いつまでも奇妙な半睡状態を続けている自分の身体からすうっと別の自分自身が抜け出して列車の廊下をうろろると歩いている。そういう前夜の錯覚と、それから今しがたの変な錯誤とが何時いつしかごっちゃになって、なんだかウイリアム・ブレイクの絵の或る複雑な構図と同じような不可解さをもって彼に迫りながら、ますます彼を眠りがたくさせた。

（二三日後の夜、彼は彼の部屋のドアの把手に人間の手みたいに巻

いてあるガアゼの繃帯に内部から血のにじみ出ているのを認めた。しかし翌日になって見ると、彼の知らない間にそれは新しいガアゼに取換えられてあった。）

そういう神経質な最初の一夜を例外にすると、そこへ入院してからの彼の病状はずっと順調であった。高原の春先きの気候とともに彼の病室の窓から眺められる南アルプスの山頂には雪が日毎ひごとにまばらになって行つた。そしてそれらは遂に何かしら地球の歯のようなものを剥むき出しながら、彼の窓に向つて次第に前進してくるように見えた。病人はそれを飽かずに眺めた。

だが、或る朝から急に雪が降りだした。そして一日じゅう小止おとみなく降つていた。もう四月下旬だというのに何と云うことであろう。そしてそれはその翌日になつても、翌翌日になつても止まなかつた。

そんな或る夜ふけのこと、あたりがあまりに騒騒しくなつたのでそれまでうとうとと眠つていた彼は思わず目をさました。眠る前にいくらか小降りになつたかと思われた雪はいつしか吹雪ふぶきになつていた。その上に突風がそれに加つてゐるらしい。そんな夜も露台に向いてゐるドアや窓は医師の命令で細目に開けておく習慣だったので、それらの隙間すきまからは無数の細かい雪が突風そのものと一しよに吹き込んできて、そこら中に手あたり次第に汚点をつけながら、彼の病室の中をくるくると舞つていた。……彼はそつと眼だけを毛布のそとに出しながら夢心地ゆめこころにそれを見入つていたが、やがてそれ

らの活潑かつぱつに運動している微粒子の群はただ一様に白色のものばかりでなく、それらのなかには赤だの青だの黄だの紫だのがまじっていて、それらが全体として虹色にじいろになって見えることに気がついた。その瞬間、彼はちよつと軽い眩暈めまいを感じはしたが、それでもなおその回転する虹に見入っていると、それがいつしか彼に子供の頃の或る記憶を喚びよ起させた。……

人が子供の彼のために幻燈を映してくれようとしている。彼は闇の中をじつと見つめている。レンズがなかなか合わない。その間、たださまざま色彩の塊かたまりりがぼんやり白い布の上にさまよっているばかりである。けれども或る期待のために子供は胸を躍おどらせている。うつとりするような瞬間が過ぎる。やっとレンズが合い、絵がはっきり見えだす。そこには雪のなかに一人の死んだ支那兵しなへいが倒れている。子供はその凄惨せいさんな光景に思わず目を掩おほってしまう。……

その子供のおれを、一瞬間うつとりさせていたのと同じような現実じゆんの罫わなが今のおれを落し入れようとしているのだろうか？ おれは何かに瞞だまされているのではないか？ そう思いながら彼はなおも

魅せられたようにその虚空に回転する虹に見入っていたが、そのうち突然、何処かでガチャリ！ と硝子ガラスの破れる音がした。と同時にあちらでもこちらでもそれと同じような物音が起った。ずいぶん沢山の硝子が破れたらしいな……と思う間もなく、彼の耳は彼自身みづかのすぐ身ぢかに起つたらしいそれよりも数倍も大きな音響のために麻痺まひしたようになった。それは彼の部屋のなかで起ったものらしくかったが、彼はそれを確かめようともせずに頭からすっぽりと毛布をかぶってしまった。そして彼は枕もとに用意してあるヴェロナアルを飲むもうとしたけれど、このまま何も知らずに眠ってしまうことも恐し

かった。それからどのくらい時間がたったか分らなかった。ただその間も彼はたえず自分の眼底に、さまざまの色の微粒子がちらちらしているのをば感じていたが、そのうち不意にエレヴェタアの下降に伴うような感じで彼の全身がすうとしたのと同時にそれらの幻覚も一時に消えてしまった。それは明らかに眠りではなかった。それはどこかしら脳貧血に似ていた。

本当の眠りはただその発作を長びかせるような作用をした。

彼がそういう一種の仮死から蘇よみがえったのは翌朝の十時頃だった。もう風はすっかり止やんでいたし、露台を四五寸埋めている雪からは水蒸気がさかんに立ちのぼっていた。そのせいばかりでなく、その露台の眺望しゅうぼうは、いつも彼のベッドの上から見えるのとは非常に様子が異ちがっていた。そしてそれが、彼の病室の窓硝子が跡方もなく破壊されていているからばかりでなしに、その露台に通じているドアがその蝶ちょう番ばんごとそっくり剥はぎとられてしまっているためであることに彼は漸しだつと気がついた。硝子の破れる音は彼もうつつに聞いて知っていたが、あんなに巖がんじょう畳じょうだったドアがこんなにまで破壊し尽されたことを昨夜少しも知らずにいたことが彼を気味わるがらせた。

南アルプスの山頂はまた一面に真白になりながら、いつの間にか彼の窓からずっと後へ退すさっていた。それを眺めながら、彼が自分のいま生きていることを確めでもするように、彼のもじやもじやになった髪の毛へひよいと手を触れたら、その一本一本が神経そのものであるかのように痛んだ。

彼は眠ることが出来なくなつた。

どうも夜中になると熱が出てくるらしい。ちょっと眠ったかと思うとすぐ汗みどろになって目がさめた。朝の体温が三十八度位で一日のうちの最高で、それから次第に下って、夕方には最低三十七度位になった。熱の系統が普通とは逆であった。しかもそれがかなり秩序立っていた。夜、眠れないのはどうもそのせいらしかった。

毎晩、十二時頃になると看護婦たちが彼の病室に見舞いにきた。彼はからかい半分彼女たちのことを「鳩ぼっぼ」と呼んでいた。それは看護婦たちが鳩の歩き方を真似まねしているような恰好をして廊下を歩いてくるからだだった。そうして看護婦たちは彼の病室のドアをすうっと音のしないように開け、しばらく室内の様子をうかがいながら闇のなかに彼が眠っているらしいのを確かめると、またすうっとドアを閉めて、再び鳩のような足どりで廊下を立去った。看護婦たちのなかにはドアも開けずにその鍵孔かぎあなから彼の様子を覗いて行くものもあった。そんな時刻にはいつもまだ眠れないでいるところの彼は、そういう看護婦たちの行動を一つ一つ手にとるように知ることが出来た。また、それまでうとうと眠っているような場合でも、きつとそのへんな凝視を彼は神経に感じて目をさましてしまうのが常であった。そういうとき彼はびっしょり汗をかいていた。彼は看護婦たちの立去るのを待ってすばやくタオルの寝間着を裏がえしにした。だが、そのうちにその深夜の訪問は十二時に限らず行われるようになった。ずっとその時刻の過ぎた夜中の二時か三時になって、まだ眠れずにいる彼はドアがひとりでに開いたり閉じたりするのを見た。誰かが鍵孔からじっと自分の様子をうかがっているのを感じた。しかもそれは一晩のうちは何回となく繰り返された。彼のその度毎たびごとにぞつとしながら、いつも眠った真似をしていた。そんな

時彼の神経過敏になった耳は、どうかすると夜ふけの廊下に何かの翼の音のするのを聞いたりした。

しかし彼はその子供らしい恐怖を誰にも訴えなかった。彼はその不眠と熱のためであるらしい幻聴に彼自身を馴らそうとした。そして子供たちが「鳩ぼつぽ」で遊ぶようにそれで遊ぼうとしていた。

だが或る朝、院長は、彼に彼が肋膜炎を再発していることを告げた。そして彼が夜ふけの幻聴のように聞いていた何かの翼の音は彼自身の胸の中から起るものであることを知らされた。

彼は夜毎に不眠に馴れていった。彼はむしろ夜眠ることを欲しなくなった。眠ることは、彼には、ただ寝汗をかくことであつたし、そのあとで高い熱の、きつと出るような悪夢を見ることに過ぎなかったから。だが彼は、不眠のまま、眼をあけたままで見てしまう恐しい夢はどうすることも出来なかった。……そんな或る夜に見たところの一つの夢であつた。いつもは開けておく筈の窓をどうしてだかその夜は閉めておいたと見える。そとは月夜らしく、その閉じた窓の隙間から差しこんでくる月光が彼のベッドのまわりの床の上まるに小さい円い斑点をいくつも描いていたが、それはまるで彼自身がそこへ無神経にしちらした痰たんのように見えた。そういう変な光線のなかで、彼はふと彼の枕もとに誰かがうな垂だれているらしいのに気づいた。ああ、Aが来てくれたな……（その瞬間Aがだれか別の人間に変わってしまった）……おお、Bだったのか、すまないな、Aとまちがえて。……おや、君はBでもないね、Cだったのかい……そんな風に、彼の枕もとにうな垂れているのは一人の男きりだったが、その男が誰だかやつと見当がつきそうになると、それはすぐ他の男に変わってしまった。相手の男がいつのまにか他の男に変わっているよ

うなことは、どんな夢にもよくあることで、そういう不思議な変化も大概の夢ではきわめて自然に感じられるものである。それが彼のその時の夢ではそう行かなかつた。その不思議な変化がどこまでも不思議で、その上それが一種の凄気せいぎのようなものをさえ感じさせるのだった。……そんな具合に彼が彼の知っているとされるあらゆる友人たちを代る代る夢に見つくしてしまつた時分になつて、彼は漸つとその一見何でもないような、それでいてこの頃の彼の夢の中では、最も彼を苦しませたところの夢から自由にされた。熱がひどく出ているらしい。彼はそれを測るために検温器を取ろうとした。だが、その検温器は彼の手から滑すべつて床の上で真二つに折れてしまつた。その瞬間、いままで窓の隙間から差しこんでくる月影だとかかり思つていたそこら中の沢山の斑点が、突然、彼の目に真赤に映つた。そしてそれが本物の疲つかのように見えた。おや、おれは何時の間にこんな血を吐いたのかしら？……彼は気味悪そうにそれから目をそらしながら、なんだかこのまま自分が死んで行くのではないかという気がされてならなかつた。そうして彼は、今しがた夢の中で彼を苦しませたところの友人たちが、彼の死を知らせる電報を手にしたまま、さまざまに驚愕きょうがくしている有様を、一つ一つ病的な好奇心をもって描きはじめていた。……

彼がその何回目かの彼の「危機」から脱するためには、四週間たつぷりの絶対安静を要した。

六月に入ってから、或る日のこと、彼ははじめて露台に出ることを許された。彼は其処そこから見えるあらゆる樹木がすっかり若葉を出

しているのに眺め入りながら、目が痒くなるのを我慢していた。それらの樹木の多くが白樺と落葉松であることを知ったのも殆どその時が始めてであった。

熱は体温表の上で一時非常にジクザクな線を描いたが、そのジクザク「#「ジクザク」に傍点」は次第にその振幅をちぢめて行きながら、遂に完全に赤線（三十七度）以下になった。だが、彼の身体はまだ何処となく不安定だった。そしてひっきりなしに身体のおちらこちらに、丁度大地震のあとに起る無数の小さな余震のように、或は頭痛が、或は神経痛が、或は歯痛が次ぎ次ぎに起った。彼はそれらの余震になおも怯かされながら、しかし次第に、露台のまわりでうるさいくらい囁いだした小鳥たちの口真似を試みたり、裏の山から腕いっぱい花を抱えて帰ってくる看護婦に分けて貰って薬罐にさした竜胆や鈴蘭などの小さな花の香りをかぎながら、彼は生き生きとした呼吸をし出した。

或る日から彼も日光浴をすることになった。

彼は看護婦から紫外線一除けの黒眼鏡を受取ると、それをすぐに掛けながら子供のようにいそいそと露台に出て行った。そして彼は初夏の太陽をまぶしそうに見上げながら、それに向って話しかけでもするように独語するのであった。

「おお、太陽よ、おれも昨日までは苦痛を通して死ばかり見つめていたけれども、今日からはひとつこの黒眼鏡を通してお前ばかり見つめていてやるぞ！」

「#改ページ」

第二部

「#ここから1字下げ」

その後御病氣御順調の由、何よりも結構です。

もしお身体にお差障さしさわりないようでしたら当分こちらへ来てみませんか。今年ことしは西洋人の別荘を借りています。私一人きりですからどうぞ御遠慮なくお出てください。うちの寝台はぎいぎい鳴りますけれど。庭には沢山あなたの好きな羊齒しだが生はえていますよ。(しかしこれはうちの撮とったものではありません。)

「#ここで字下げ終わり」

七月の初めに、軽井沢に行っている彼の叔母から、美しく密生した羊齒ばかりを撮影した絵葉書が、まだ療養所にいる彼のところへ届いた。彼はすぐそれに返事を書いた。

「#ここから1字下げ」

絵ハガキを有難う。

僕はすぐにでも叔母さんの「羊齒山荘」へ行きたいのですけれど、院長がまだ許してくれません。でもあと一週間位したらと僕は院長と約束をしました。それまで僕はせつせと日光浴でもしていましたよ。僕は足ばかり出しているものだから、なんだかマホガニ製の義足でもしているようになりました。左様なら。

「#ここで字下げ終わり」

七月も末になった或る朝、その「羊齒山荘」に突然、彼は、西洋人の好んで着るような派手な柄のスウェタアかなんぞ着込んで、妙

にはしゃいだ姿をあらわした。手には籐とうのステッキを持っていきり、何処どこか散歩からでも帰ってきたような恰好かっこうであった。雑草あが生おいかぶさるようになっていて、小径こみちの両側には、とりわけ羊齒やうしが見事に生長していたが、それが彼にはあたかも可愛らしい手をひるげて自分を歓迎している子供たちのように見えるらしく、彼を微笑ほほませていた。……

そのこの奥まったヴェランダに、彼の叔母がひとりで籐椅子よに凭よりかかっているのを認めると、

「叔母さん……」

そう彼は人なつこそうに元氣のいい声をかけた。

「……そうしているところはまるで羊齒の女王みたいですわ」

「そう見えて？……女王なら、私は何の女王でもいいわ」叔母さんは彼ににっこり笑って見せた。

彼は靴のままヴェランダに上って、そこにある籐椅子の一つにどつき腰を下した。そうしてすこし荒い呼吸いきづかいをしていた。

「お疲れになったでしょう。すぐお寝やすみにならない？」

「ええ……叔父さんは？」

「ずっと東京よ……また瘦やせっぱちが二人寄やつてたかってきつと笑うことよ」

「ふ、ふ、僕もここへ来る途中で考えたんですがね……」

「………？」

「あのね、昔はそれでも、叔母さんと僕とで目方を合せると叔父さんのよりは五一きご疔くぐらい多かったでしょう。でも、もう駄だ目めなの。……

……僕はあの頃から見ると五疔ごくはたっぷり減へってしまったからなあ」

「そのかわり、叔母さんはすこし肥ふとったでしょう？……」

そう言われても、彼はもう叔母さんの方を見ようともしないで、元氣なくじつと目をつぶっていた。……

その羊齒の密生している叔母の別荘には、去年まではスコットランド人らしい老夫婦がいかにも品よさそうに暮っていた。毎年の夏、彼は散歩の折などこのへんの草深い小径が好きでよくこの家の前を通ったものだが、その度毎たびごとにいつもその老夫婦がヴェランダに出て黙ったまま、お茶かなんか飲み合っているのを見かけたものだった。なんでも三十年近く日本で宣教師をしている人だそうだが、そんな宣教師というよりも寧ろむし哲学者かなんかのように見えた。この高原のどんな小径にでも勝手な名前をつけたがる西洋人に倣ならって、彼もこのへんの小径を自分勝手に Philos 自分 ウェグWeg と呼んでいたくらいだ おちが懐かしいのも趣味のいむすこ

○ まるテエブル

せんたく○コオフィイわか
や

かか ゆいしよ りす

叔母のところへは毎日のように彼女と同年輩ぐらいの女の客が訪れてきた。そういう女客ばかりが二三人一しよに落ち合うようなこともあった。「みんな私の学校友達なのよ」叔母はそう言っていたが、いずれ叔母に聞いてみればそれぞれ由緒ゆいしよのある貴夫人たちなのであるうけれど、そういう貴夫人たちというものはどんな会話をするものかしらと、一度二階の彼の寝室からじつと耳を傾けて聞いていると、自分の別荘の裏の胡桃くるみの木に栗鼠りすが出たとか、野菜がどうだとか、薪まきがどうだとか、そんな話ばかりしているので彼はひとりで苦笑した。

そういう時には、彼は誰にも見つからないように、二階から降りてこっそりと台所の裏へ出て行った。そこには落葉松が繁茂はんましていて涼しい緑蔭をつくっていた。彼はいつもそこへ籐の寝椅子を持ち出してごろりと横になった。其処そこからはよく伸びた落葉松のおかげで太陽がまるで湖水の底にあるように見えた。どうかすると彼はそこでそのまま眠ってしまうこともあった。

そんな日のある日、もう客が帰った跡と見えて、その裏庭に面したフレンチ・ドアに叔母がぼんやり凭りかかっているのを見つけたと、

「叔母さん」

と彼はその寝椅子の中から声をかけた。

「ここにこうしていますとね、僕はきつとドロシイのことを思い出しますですよ……どうしてかしら？」

叔母さんはまだぼんやりしている。よほどお疲れになったと見える。

「ドロシイは今年は来ていませんか？」彼はうるさく質問するので

ある。

「ドロシイさんの家は何でも去年カナダへお帰りになったそうよ」
 「そうですか。 おや、おや、僕は年頃のドロシイが見たかったんだがなあ……」

……数年前、彼はそのドロシイの隣りの別荘に一夏を暮したことがあった。やはり叔母と一しよに。 その頃ドロシイはまだ七つか八つ位であった。彼はときどきそのドロシイや彼女の小さな妹たちと一しよになって遊んだ。ドロシイは綺麗な女の子で彼女の美しい名前によく似合っていた。日本語も上手だった。しかし彼と話をしているうちに日本語が分らなくなると英語でしゃべった。そうして英語などで人としゃべったことのない彼を一寸黙らせた。そういう時いつまでも彼が黙っていると、彼女は何だか困ったような真面目な表情で彼を見上げるのであった。彼はそういう表情を美しいと思った。 或時、彼はドロシイとその小さな妹とを連れて、オルガン岩のほとりへ散歩に行った。その散歩の間、ドロシイは絶えずはしゃいでいたが、その帰途、突然一つの小さな崖の上へよじのぼってしまった。それは彼女によじのぼることはどうにか出来ても、そこから下りてくることは危険に思われるほどの急な傾斜だった。 どうするだろうと思っただけで見てみると、ドロシイはちよつとその傾斜を見て首をかしげていたが、いきなりそこを駈け下りてきた。 あぶない！ と彼が叫ぶのと殆ど同時に、彼女は途中で足を滑らしながら、彼の足許へもんどり打って落ちてきた。 ……しかし彼女はすぐ起き上った。 見ると彼女の白い脛には泥がつき、何かで傷つけたら

しく血が滲^{にじ}んでいた。彼女はしかしそれを見ても泣かずにいた。ともかくもすぐそのホテルまで連れて行って何とかしてやろうと思いながら、その怪我^{けが}をした少女とそれからもう歩き疲れているらしいその妹とを二人、両手に引張ってホテルに向って歩いてゆく彼の方がよほど気が気でなかった。そのうち彼はこりや俺^{おれ}の方がすこしあやしいぞと思ひ出した。……彼はどうかした機会に、血を見ると、それが自分なのであろうと、他人なのであろうと、すぐ脳貧血を起してしまう癪^{さく}があった。そうして今も今、彼はドロシイの白い脛^{はざ}に薔薇^{ばら}色の血が滲み出ているのを見ているうちに、どうやらそいつを起したらしいのである。彼はホテルの玄関の次第に近づいてくるのを、うるさく顔にまつわりつく蜘蛛^{くも}の巣のようなものを透して、やっとのことで見分けていた。……

「ブランディ！ ブランディ！」

一人の西洋人がそう叫んでいるらしいのを彼はすぐ顔の近くに聞いた。それから彼は、自分がホテルの床板の上にあおむけに倒れながら、誰かに自分の足を宙に持ち上げられているらしいことに気がついた。それと同時に甘ったるいような香水のにおりを彼は臭^かいだ。彼を介抱してくれているのは西洋人の夫婦らしかった。

「ブランディ！」

彼の足を持ち上げていてくれるその西洋人は、漸^{やう}く意識を回復しだした彼の上にかがみながら、ポオイの持ってきたらしい琥珀^{こはく}色のグラスを彼の唇^{くちびる}に押しあてた。彼はそれを一息に飲み干した。

「……………？」

彼はその親切な西洋人たちにどんな言葉で感謝を示したらいいのかわらなかつたので、ただにつこりと笑って見せた。

その時彼の額へ手をやっていたその細君らしい西洋婦人がひよいとうしろを振り向いたので、その方へやっとう頭を持ち上げながら彼も見てみると、ホテルのポオチのところにもドロシイとその妹は、丁度ホテルへ遊びにでも来ていたと見える彼女らの友達らしい五六人の少女たちに取りかこまれていた。そうして一種の遊戯かなんぞをしているように、ドロシイの説明を聞こうとしていくつもの金髪を一とところに集めているそれらの少女たちの姿は、まだすこし頭の痺れている彼には、あたかも葡萄の房のようにゆらゆらと揺れながら見えた。……

……ここにこうして居ると、そういう数年前の光景の一つ一つが、妙に生き生きと彼の心のなかに蘇ってくるのは、どういう訣かしらと考える度毎に、彼はこの樹蔭に何かしら一種特別な空気のあることに気づかないではなかったけれど、つい面倒くさいので彼はそれをそのままにしておいた。だが、或る日のこと、いくらか気分よかつた彼はその原因を調べてやろうと思いつた。その樹蔭は奥へ行けば行くほど彼が名前も知らないような雑草が茂るがままに茂っていた。これはきつとこの雑草の中に何か特別な香りを発するものがあつて、それが彼の記憶を刺戟するのもかも知れないぞと思つた。そこで彼はこの雑草のなかを鼻孔をひろげながら出たらめに歩き廻つてみた。なるほど、何か特に強く匂っている。それを嗅いでいると、なんだか気持がすうすうしてくる。おや、おれはまた脳貧血をやりそうだと、と彼がちよつと錯覚を起しかかつたくらい、その香りは彼の発作の直前の気持を思い出させる。こいつだな、と

思つて彼はその香りをたよりに、その香りの生じていそうなところをむき「#「むき」に傍点」になつて捜したけれど、それが一面に茂っている雑草のどの辺であるのかすら一向に見分けがつかなくつた。だが、その香りは何処かしらからますます鮮明に匂ってくる。彼はそこにぼんやり佇たたずんだまま、何となく自分が盲目になつたような感じさえ持ち出した。……

だが、彼は遂ついににその香りの正体を捜しあてた。彼の足が偶然にもそれを踏んづけたのである。彼の足もとには、暗緑色の細かい葉をもつた草が一かたまりになつて密生していた。その一つを手折つて見ると、その葉は縮緬ちりめんの皺しわのようにちぢれていて、それが目にしみるほどの強烈な光りを放つていた。何かの匂いに似ていると思つたけれど、どうしてもそれが思い出せなかつた。彼はそれを叔母のところへ持つて行つた。

「叔母さん、これ、何という草だか知つていませんか？ これですよ、僕にドロシイのことを思い出させるのは……」彼は二三年前の発作のことを思い出しながら言つた。

叔母はそれを手にとつて見てちよつと嗅いでいた。

「なんだか薄荷はっかみみたいな香りがするわね。薄荷草というのじゃないこと？」

「あ、そう、そう、こりゃ薄荷のにおいでしたね……」

彼が発作を起すときの何となく快よいような気持は、丁度このにおいを嗅いでいるときの気持にそっくりであることに彼はいま始めて気がついたのである。それは彼には一つのすばらしい発見のよう
に思われた。

まだ八月の半ばを過ぎたばかりなのに、もう秋風らしいものが周囲の木の葉をさわさわ揺すぶっているのを耳にひやりと聞きながら、或る朝、彼が二階のベッドの中でいつまでもぐずぐずしていると、突然戸外でマグネシウムを焚いたような爆音がした。それと同時に家全体がはげしく動揺した。

「浅間山よ……早く来てごらんなさいよ」階下のヴェランダで叔母が叫んでいるらしかった。

彼は寝間着の上に着をひっかけてヴェランダへ降りて行った。

「僕はまた写真屋がマグネシウムでも焚いたのかと思った。それにしては朝っぱらから変だと思ったけれど……」

なるほどヴェランダからは、浅間山がその花キャベツに似た噴煙をむくむくと持ち上げている何とも云えず無気味な光景がはつきりと見えた。その無気味な煙りの中には、ときどき稲妻のようなものが光っていた。その閃光は熔岩と熔岩とがぶつかって発するものだということを、去年の夏、彼は人から聞いていた。

彼はその凄じい噴煙を見上げながら、丁度今の自分と同じようにそれを見上げていた去年の夏のまだいかにも健康そうだった自分の姿をひょっくり思い浮べた。そうしてそれに比較すると、今の自分の方がかえって夢の中にもいるような気がしてならなかった。……

もうヴェランダはうすら寒かった。

彼は客間には行って行きながら、こんな朝はもう暖炉を使うのも悪くはないなと思った。彼はこの別荘に來た時から、その客間の片隅に古い熔岩を組み合せてこしらえられてある山家らしい暖炉に目をつけ、それを一度使ってみたいと始終思っていたのである。それ

で、その朝、とうとう彼は女中に言いつけて松の枝をどっさり持って来させた。そうして自分で煖炉の前にしゃがみ込みながら、それを焚きつけにかかった。

やっとその小枝に火が燃え移って、ぱちぱちとそれが快活な音を立て出すと、叔母も自分の椅子をその火のそばに近づけた。

「そうしているところは、あなたも随分丈夫そうになってね」叔母が言った

「そうですか。でも、もうかれこれ一年になるんですからね……

ねえ、叔母さん、僕ね、去年二回一啗^{かつ}血したでしょう。……最初の時は、どういうもんだか気持がよかつたくらいでしたよ。そりゃ何しろ生れて始めてなので、びっくりしたことはびっくりしたけれど、もうこのまま死んで行くのだと思つたら、かえって落着いてしまつたのでしょね。……だけど、二度目のときはほんとに厭^{いや}だったな

あ。あの時はもう、ひよつとしたら助かるかも知れないという気がしていたもんだから、かえって慌^{あわ}ててしまつて、僕は無理矢理に咽喉^{のど}から上げてくる血を半分ばかり飲み込んでしまつたんだからなあ。そのあとの気持の悪いつたらなかつたし、医者には叱^{しか}られるし……僕はあの時くらい人間の生きようとする意志を醜^{みにく}く思ったことではないなあ……」彼は何時^{いつ}かひとりごとのように言いつづけていた。が、ふと彼のそばに叔母が何だか煙^{けむ}ったそうな顔をしているのに気づくと、彼は強^しいて口をつぐんだ。そうして一本のくすぶっている小枝をいじくっていたが、その様子には何処^{どこ}か言いたいことがどうしても言えないでそれをもどかしそうにしているようなところがあった。恐らく彼は叔母に向つてこう言いたかつたのかも知れない。……

「叔母さん、そんなに僕が生きていればいいと思いますの？」……
そうして二人はそのまましばらく黙っていた。
そのうちにさつと何かが木の葉の上に降ってくる音がし出した。
それは乾いた雨かわのような音だった。
「浅間の灰かな？……」叔母はそうつぶやくと、そっと立上って窓
ぎわへ寄って行った。

底本：「燃ゆる類・聖家族」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年11月30日発行

1970（昭和45）年3月30日26刷改版

1987（昭和62）年10月20日51刷

初出：「改造」

1931（昭和6）年12月号

初収単行本：「ルウベンスの偽畫」江川書房

1933（昭和8）年2月1日

初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977（昭和52）年
5月28日、解題による。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったの

は、ボランティアの皆さんです。